

したが、現在、東北新幹線で使われています。2020年東京オリンピックの閉会式で、大竹しのぶ(1957-)と杉並児童合唱団によって歌唱されました。「東北大震災からの復興オリンピック」をうたったのこととされます。

さそり座のアンタレス、わし座、おおいぬ座のシリウス、りゅう座、オリオン座、アンドロメダ大星雲、おおぐま座の北斗七星、こぐま座の北極星などが歌われています。厳密には、星の距離関係など、誤りが見られることが指摘されていますが、そんな細かいことは横に置き、賢治がイメージした故郷花巻の、満天の星が広がる美しく壮大な夜空を思い浮かべて聴いてください。今日はダジックアースに詩の中の星を投影します。

♪『惑星』より《木星》グスタフ・ホルスト作曲

グスタフ・ホルスト(1874-1934)が書いた『惑星』の中の1曲です。「天体」と言えばホルストの『惑星』が定番ですが、科学的な知見に基づいたわけではなく、占星術から着想を得て作られており、ギリシア・ローマ神話の神々の性格が作曲の発想となっています。《木星—快樂の神》は、本来、長い曲ですが、中間部が非常に人気で、イギリスでは第2の国家と言われるくらいで、国家的な式典で歌われています。また、ラグビーのワールドカップでも少しアレンジした《ワールド・イン・ユニオン》がテーマソングとして使われています。日本でも平原綾香のカヴァー・バージョンで大ヒットしたのが記憶に新しいです。

♪オペラ『フィガロの結婚』より《もう飛ぶまいぞこの蝶々》

ロレンツォ・ダ・ポンテ 台本 ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト作曲

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756-1791)が、1786年に作った『フィガロの結婚』というオペラの中の、主役フィガロのアリアです。バリトンの代表曲で、田中純先生の本領を存分に発揮して頂けるアリアをお聴き頂きたくて選びました。『フィガロの結婚』は、カロン・ド・ボーマルシェ(1732-1799)が1778年に書いた戯曲を基にしています。台本はロレンツォ・ダ・ポンテ(1749-1838)が書きました。貴族の愚かさを描いて彼らを批判した内容です。この曲は、フィガロがつかえる伯爵夫人の小姓である、年若いケルビーノが、軍隊へ行くことを伯爵に命じられたので、浮気心を抑えて頑張れと励ましている内容です。蝶々は、女性とみれば好きになってふらふらしているケルビーノを指しています。ケルビーノは未成年の男性という設定ですが、オペラ上演では「ズボン役」と言って、女性の低い声の歌手が歌います。宝塚さながらの世界です。

♪《小さな世界》ロバート・シャーマン&リチャード・シャーマン作詞・作曲

ディズニーと言えばこの曲です。1962年にシャーマン兄弟によって、新アトラクション用に作られました。「小さな」というと少しネガティブな響きがありそうですが、世界中のどんなに地理的に遠くのみんなども、気持ちを共有して、必ず繋がれるとうたった歌です。今日は園児さんが踊ってくださるということで楽しみにしています。